

じっくり、あきらめないで、

新たな窓を開く作品を

指田 和

この原稿の依頼の封筒を受け取ったのは、昨年十一月二十四日。前日の北朝鮮による韓国・延坪島への突如の砲撃の様子を、TVで食い入るように見ているときだった。

依頼書に記された自分の役割（担当）「ノンフィクション」を見て、正直とても重く感じた。一つには、砲撃の映像があまりにもショッキングで、現実Ⅱ「子どもたちに託された先の暗い未来」という思いがわたしのお腹の底に沈殿してしまっただからだったと思う。もう一つは、まだノンフィクション読み物を書いたことがないわたしに、一年を振り返るようなことができるのかという不安からだった。

時おりため息をつきながら、二〇一〇年刊作品を読み進めた。が、実際は数冊読み終えるころからそんな不安はど

こかへ飛び、ただただ本のおもしろさに引き込まれる日々だった。小学生のころ、給食を食べるのも忘れて学級文庫の読書に熱中したときの感覚を思い出した。

まず、この原稿が一年を振り返る的確な評論になっていないことをお詫びしたい。でもノンフィクション作品のおもしろさに改めて気づいた者の一人として、新鮮な驚きがあったり、深く考えさせられたりした作品を、紙面の許す限り挙げさせていきたい。

●科学の目を開かせてくれる窓

昨年出版された本を調べ、できるだけ手元に集めたとき、幾分冊数が多く見えたのは、自然を相手にしたり、自然科学分野の研究で活躍する人たちの姿を紹介するものだった。中でも仰天、未知の世界への目を開かせてくれたのが『見つけるぞ、動物の体の秘密 ―動物かいぼう学者が挑む進化のなぞ―』（遠藤秀紀 くもん出版）。著者は東京大学総合研究博物館教授・博士（獣医学）で、パンダの手のかぎ爪がついた5本の指が、なぜ竹を器用に握ることができるのかを解明した方。パンダのみならず、とにかく各地各方面から動物死体を集めて骨格標本を作成し、骨から見えてくる動物の生態や進化の謎を解き明かそうとする様子が生き生きと紹介される。なんとも不思議な感覚だったが、精一杯生きた動物たちが骨格標本として生まれ変わり、未来の